

2019 年度グローバル・コミュニケーション学部
教育、研究、社会貢献活動に関する自己点検・評価結果について

1. 教育活動

本学部では開設以来、各教員がシラバスに記載した授業内容や到達目標を踏まえ、補助教材、パワーポイントの作成、e-classなどの情報システムの活用をとおして、教育効果を最大限に上げるべく、鋭意努力してきた。また、演習系、講義系いずれの授業においても、頻繁な課題提出、クラスディスカッション、ペアワークやグループワークなどのアクティビティによる学生の積極的な授業参加を促すと同時に、きめ細かなフィードバックを与えて、学生の主体的な学びを促す工夫を行ってきた。2016年度から、全コースで導入された新カリキュラムも4年目を迎え、さらなる教育効果の向上が見られた。

最終学年の4年次生の授業においては、学びの総括として、演習科目における論文指導や、「Seminar Project」におけるプロジェクトの企画・運営の指導を行い、本学部が目指す実践と教養のバランスのとれたカリキュラムの理念を実現している。

また、初年次教育が特に重要との考えから、1年次生の授業出欠状況に関する情報共有を組織的に行い、必要な学生には個別指導を行なった。また2017年度、新たに策定した「成績不振及び長期欠席学生に対する個別指導の指針」に基づき、全コースで一貫した指針のもと、学生指導にあたった。このように、学生との対話を通じたきめ細かい教学指導を徹底することで、一人ひとりの学生が充実した学生生活を送ることができるよう、努めている。

正課授業以外の主な教育活動としては、本学部学会の小冊子『Cosmos』発行に加え、オープンキャンパスにおける「Welcome to GC」と題した学部紹介、日本語コースの留学生と英語・中国語コースとの「タンデム・パートナー」制度を通じた日本語コースの留学生と英語・中国語コースの学生との交流促進などが挙げられる。

こうした取り組みを継続的に実施した結果、「高度な外国語運用能力を駆使してfacilitator、negotiator、administratorとして活躍できる国際人を養成する」という本学部のディプロマ・ポリシーを達成できたと自負している。また、2019年度には、ディプロマ・ポリシーの達成度を検証するためのアセスメント・ポリシーを定めた。このアセスメント・ポリシーでは、卒業前に提出するゼミ論文をもとに、4年間の学びを検証することが示され、そのための詳細の評価項目を含めたルーブリックも作成した。これにより、より客観的な学びの検証が可能となった。

2020年3月には第6期生（2016年度生）が卒業したが、高度な外国語コミュニケーション能力、異文化理解力、問題発見・解決能力を身につけた本学部の卒業生は、社会でも高く評価されており、前年度に引き続き2019年度も好調な就職状況となった。

加えて、英語コースでは2017年度4月より、教職課程（中一種免（英語）、高一種免（英語））が開設された。高度な外国語コミュニケーション能力を習得し、次世代の英語

教育を牽引する中学校、高等学校英語科教員の育成も開始後 4 年目となった。

2. 研究活動

教員は言語学、社会科学、教育学、文化研究、文学などの諸分野で、著書、論文執筆に加え、学会での研究発表、シンポジウムのパネリスト、ポスター発表などの活動をとおして活発に研究活動を行った。また、本学部の教員と学生によって構成されるグローバル・コミュニケーション学会の学会誌『コミュニカーレ』第 9 号も発行された。

3. 社会貢献活動

多くの教員が学会運営のための委員職につき、学外の社会活動に積極的に関わった。また、市民講座での講演、高等学校からの要請による模擬講義への協力等をとおして、研究成果を社会に還元する活動を行った。また、数名の教員は、地域のボランティア活動に協力し、社会貢献に積極的に取り組んだ。